

婦人宣教師、ミセス・プラインの

## 「おばあちゃんの手紙」(1)

～アメリカン・ミッション・ホームの

創立者の一人～

小林 恵子

一九八九年のロンドン大学で開催されたO・M・E・P（世界幼児教育機構）大会のテーマは「The Voice of The Child」であった。そのテーマを聞いたとき、私の心にすぐ浮かんだのが、明治四年に横浜に来た三人の婦人宣教師のことであった。この女性たちは、当時、社会問題となった混血児―日本の婦人と外国人との間に生まれた子ども―の声なき声を聞いて、その養育のため米国から海を渡ってやってきた人々である。この大会で、私は「一八七一年に日本に来た婦人宣教師」と題し拙い英文で発表したのであるが、そのあと何人かの外国人から「貴方の発表された混血児の問題は今、私たちの抱えている大きな問題なのです」と言われた。

昨年末、O・M・E・P主催で「子どもの権利条約」フォーラムが各地で開催されたが、百三十年前、混血児のために日本に来た三人の婦人宣教師の功績は今改めて子どもの人権を守る視野から高く評価されるべきであろうと考える。

\*

「おばあちゃんの手紙」は、ミセス・ブライン（三人の婦人宣教師の一人）が米国にいる孫にあてた手紙である。

この手紙を読者の方々によく理解して頂くためには、最初に何故この三人の婦人宣教師が日本に来るようになったか、その背景となった時代や当時の日本の女子教育と混血児の問題などを書いておかなければならない。

ただし、私は『幼児の教育』誌（第八十一巻第七号）で「日本における最初の私立幼稚園とその背景（四）——横浜ミッシオンホーム（亞米利加婦人教授所）における女子教育と幼児教育——」と題し既に発表しているのであるが、以前のことであり、お許しを願って同じような事を最初に述べておきたいと思う。

## （一）横浜に來た宣教師と女子教育

プロテスタント（新教）の宣教師が日本に來たのは、一八五九（安政六）年、日本が横浜、長崎、函館を開港して欧米諸国と貿易を開始してからのことである。

当時、欧米の諸教会は外国伝道への使命に燃え、中国、朝鮮、印度と布教を開始したが、特に米国プロテスタントの各派はキリスト教禁制下にあった日本にすぐれた宣教師を派遣した。

横浜に來た最初の宣教師には、ヘボン（J. C. Hepburn）、ブラウン（S. B. Brown）、バラ（D. V. James Ballagh）、フルベッキ（G. F. Verbeck）などがあり、この人々は日本の近代化の推進に開拓者的な役割を果たした。和英辞書の編集、聖書の和訳、教会の設立、ミッシオン・スクール、病院の設立など、その活躍は多方面に及んだ。日本の医学、自然科学、文学、音楽など多くの分野がその源泉にキリスト教の影響を少なからず受けているのを知るとき、そこには宣教師が最初に小さな種を蒔いていた事実にいきあたるであらう。日本の女子教育も幼児教育も最初の種まきは宣教師であった。

さて、宣教師夫妻が日本に來て最も驚いたことは、婦人の社会的地位が低く女子教育が著しく遅れていることであった。当時の世間一般の考えは、儒教精神にたつ

原益軒の「女大学」が金科玉条とされ、女子に學問が無益であるばかりか害があるとさえ考えられていたのである。こうした女子への蔑視と束縛にたいし、ブラウンは「女子教育は日本がキリスト教國の仲間入りする前にやりとげなければなりません。そして、その仕事は今すぐに始めるべきです」（註1）と述べ、女子教育こそ、緊急の事業と考えたのが、横浜に住んでいた宣教師たちであつた。女子教育の草分けは、こうした宣教師たちの努力によるもので、明治三年にミス・キダーによつて創立された横浜のフェリス女學院が先驅である。

## （二）混血児の問題

さて、一漁村にすぎなかつた横浜が貿易港として開港すると、その發展はめざましいものがあつた。輸出の主なものゝ生糸と茶で、港は外國商館の人々や船の出入りで賑わい、他國の船員や商人の遊樂の場ともなつてゐた。ヘボンやブラウンはこの横浜を「泥沼のような社會」（註2）と述べているが、國際港として文明開化が

華やかに發展する裏面では人々の風儀がみだれ、様々な社會問題を抱えることになつた。その一つが「らしやめん」と稱する日本女性と外國商人などとの間に生まれた混血児の問題である。當時はとりわけ混血児に對し、忌み嫌う風潮があり、その多くは私生児として蔑視され罪惡視されただけに、こうした社會問題は横浜に住む宣教師たちの心を痛め、悩ませるものとなつた。その現状を憂い、宣教師バラは米國の基督教會に混血児の救済と女子教育機關設置の緊急の必要を強く訴えたのである。

## （三）當時の米國と混血児の問題

その頃、米國は一八六一年の南北戰爭を機として奴隸解放運動が起こり、すべての人間は等しく人間として尊重されるべきことが強く叫ばれた時代であつた。

人格の尊嚴、自由平等をかかげ、人道主義にもとづく社會改良運動が活発に行われた。監獄の改良、障害者の救済と教育、貧しい人々の生活條件の改良、貧困の教育など、様々な社會改良運動が推進された。幼稚園運動も

その一つで、フレーベルの精神を尊重し、博愛主義に根ざし、貧しい家庭の子どものために無料幼稚園が各地に設立された。

こうした人道主義にもとづく様々な社会改良運動はやがて広く世界に視野をむけ、人種や国境を越え人々を援助していくエネルギーを生み出した。とりわけキリスト教プロテスタント諸教派は異教の地であるアジアへの伝道と教育への使命に燃え、アジアの諸地域に多くの宣教師を派遣した。

このような時代のなかで、米国の基督教会にバラ宣教

師が訴えた横浜の混血児の問題は、人権差別や人間の尊重を考えようとしていた当時であって、応じるにふさわしいものであった。そして、この訴えに応じたのが米国婦人一致外国伝道協会(The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands 略してW・U・M・S)である。

#### (四) 米国婦人一致外国伝道協会

この協会は、東洋の婦人と子どもの伝道と教育、福祉を願い、ドリーマス夫人(Sarah Platt Doremus)を



初代会長として一八六一年、ニューヨーク市に創設された。ドリーマス夫人は九人の子どもの母であるとともにキリスト教社会事業家として活躍した勝れた女性で、彼女の関心は多くの虐げられた女性や子どもたちに向けられた。ニューヨーク市の監獄の改良や女性囚人のための家庭的なホームの設立、貧しい婦人労働者のための保育所や病院など、その活躍は多方面にわたっていた。(註3) 彼女は改革派の教会員であったが、東洋の婦人と子どものために教派の違いを越え全米の教会婦人会が一致して婦人宣教師を東洋に派遣することを提唱した。こうして、超教派によるキリスト教の女性たちの手によって組織された全米で最初の女性のミッションが米国婦人一致外国伝道協会であった。

ところで、一八六〇年代の米国では、まだ女性の選挙権も財産所有権も認められず、女性たちの社会的地位も低く、その活動にも限界があった。外国伝道には莫大な資金が必要であるが、その資金集めには大変な苦労があった。このために会員たちは、小遣いを節約して献金

し、衣服や小物、そのほか調度品などをバザーを開催して売却し、その利益を資金にまわすなど、献身的な努力を重ね続けて長期にわたって資金を拵えたのである。こうした資金についての苦労や人々への感謝の言葉は「おばあちゃんの手紙」にも何度か書かれている。

### (五) 三人の婦人宣教師

この協会は、一八六一年から要請のあったビルマ、インド、中国の北京に婦人宣教師を次々と派遣し、女学校、孤児院、婦人小児科病院等を設立した。(註4) 日本への派遣は協会創立の十年後のことで、バラ宣教師の強い要望に応じ、混血児の養育と女子教育機関の設立のため三人の婦人宣教師を派遣することになった。

三人の女性の名前は次の通りである。

\*ミセス・メアリー・P・ブライン

(Mary Putnam Prynn 1820 - 1885)

\*ミセス・ルイズ・H・ピアソン

(Louise Henrietta Pierson 1832 - 1899)



ミス・クロスビー



ミセス・ピアソン



ミセス・ブライン

### 三人の婦人の宣教師

\*ミス・ジュリア・N・クロスビー

(Julia Neilson Crosby 1833—1918)

三人のうちの最年長者はブラインであった。この女性が「おばあちゃんの手紙」を書いた筆者である。ブラインはこの協会のアルバニー支部副会長であった。そして協会のポーキプシー支部からはミス・クロスビーが、ケンタッキー支部からはミセス・ピアソンがブラインのアシスタントとして参加することになった。

三人は、いずれもニューヨーク州の出身で日本に来たとき、ブラインは五十一歳、ピアソンは三十九歳、クロスビーは三十七歳であり、W・U・M・Sの規則どおり、家庭に束縛されることのない未亡人と独身女性であった。

ブラインについては次回に詳しくのべることにして、ここではピアソンとクロスビーについて述べておきたい。

ピアソンはニューヨーク州バチスタルの生まれで、父は米国に帰化したフランス人で生涯を教育事業に尽くし

た人である。母は博学な米国婦人で両親ともに熱心な基督教徒であった。四歳で早くも学校に入ったと伝えられるが（註5）彼女が後にその生涯を伝道と教育事業に捧げたのも両親の影響が大であったと考える。故郷のバチスタル大学を卒業後、ピアソン氏と結婚し、三人の娘と一人の息子に恵まれたが、幸せな家庭は長く続かず、二十八歳で夫を亡くし、子どもたちも次々と亡くなった。この悲しみを乗り越えようと、彼女は教育事業に力を入れることとなり、婦人宣教師として日本へ行くことに自らの使命を感じたのである。

クロスビーは大学教授ウイリアム・ヘンリー・クロスビーの長女としてニューヨーク市で生まれた。父母ともに名門の出身で両家ともアメリカ独立戦争の時の將軍の子どもであった。（註6）三人のなかでは一番若い独身の女性である。

これらの三人は協会の呼びかけに神の声を心に聞いて応じた人たちであった。

（国立音楽大学）

〈註〉

- （1）「フェリス女学院一〇〇年史」 フェリス女学院 一九七〇 7頁
- （2） 同右 21頁
- （3） Dictionary of American Biography 377頁
- （4）「横浜共立学園120年の歩み」 横浜共立学園 一九九一 18頁
- （5）「L・H・ピアソン」 近代文学研究叢書 第五卷 抜刷 18頁
- （6）前掲書「横浜共立学園120年の歩み」 23頁